# おわりに

2009年に刊行された『教育と保育のための発達診断』は，23刷を重ねるロングセラーになりました．また，この本をテキストとする「教育と保育のための発達診断セミナー」（特定非営利活動法人・発達保障研究センター主催）は，全国17カ所，4,000人近くの参加を得て，学習の輪を広げてきました．とくに，このセミナーの参加者には，はじめて発達保障の考え方やその発達理解・発達診断の方法に出会われた方が多く，提出された感想文からは，このような取り組みが切実に待たれていたことを実感しました．そして，子どもたちや障害のある人たちを発達の主人公として尊重し，その幸福に生きる権利の保障を願う思いの強さに，テキストの執筆者・講師，セミナー主催者は大きな励ましを得ることになったのです．

このたび，10年余が経過したことを踏まえて全面的な改訂を行い，新しい構成のもとで『新版・教育と保育のための発達診断 下巻 発達診断の視点と方法』を刊行いたします．

改訂内容は，以下の通りです．

①「Ⅰ　発達保障のための子ども理解の方法」として，発達理解・発達診断の基本視点，心理学的子ども理解と実践的子ども理解をつなぐ方法などについて新たに論じました．このⅠの学習を前提として，Ⅱに進んでいただきたいと思います．

②「Ⅱ　発達の段階と発達診断」は，旧著の構成を引き継ぎつつ，発達研究の進展を踏まえて新たな知見を加えました．また，指導・支援の方法について，より多面的な内容になるように加筆を行いました．

③「Ⅲ 『発達の障害』と発達診断」は，旧著の内容を発展させて，「Ⅱ」との関連がわかるように加筆を行いました．

旧著の，子ども・障害のある人たちの権利保障の歴史と発達保障，ライフステージにおける発達診断の実践，さらに新しいテーマとしての，発達診断と教育・保育のつながり，発達の質的転換をめぐる諸問題，個別の障害と発達診断の方法などについては，『教育と保育のための発達診断 上 発達診断の基礎理論』として刊行します．

編者として，新版の編集に携わりながら，次のことを思いました．

各章で書かれている子どもたちや障害のある人たちは，家族や指導者のまなざしのなかで，ときに悲しく悔しい涙を流しながらも，発達の道行を笑顔をもって歩いています．その記述は，一人ひとりが，まるで目の前にリアルにあるように感じられるのです．また，指導や支援の方法として提案されていることには，まさに「発達の芽」として生まれつつあるものへの最大限の尊重と，それを守り育てようとする強い思いを感じるのです．これらの記述は，きわめて具体的なものですが，そこにはそれぞれの執筆者の理論的な確信に裏打ちされた力強さがあります．

編者としてこのように感じ，そして書くことは，自画自讃のそしりを免れないことかも知れません．しかし，編集過程で不思議な幸福感に包まれたことは事実です．

本書の執筆者のほとんどは，保育者（保育士，幼稚園教諭など）や教師の養成に携わる大学・短期大学の教員です．前著より10年余の経過は，その教育経験の積み重ねでもありました．

大学から送り出した保育者や教師，そして未来の保育者・教師を夢見る学生に語りかけるような筆致が，本書の特徴でしょう．そこには，「教え子」への愛情とともに，彼らが出会うであろう一人ひとりへの優しいまなざしがあります．彼らには，子どもや障害のある人と向きあい，その本当の心が理解できないで眠れぬ夜を過ごす日もあるでしょう．同僚や保護者と心通わすことには，さらに時間と経験が必要です．そのときどんな高邁な理論も，すぐには彼らの力になってくれないでしょう．自分でのりこえていかなければならない苦労のときに，思い出してほしいこと，きっと支えになるであろうことを，本書の執筆者は，自らの研究を重ねながら，大学で心を込めて語りつづけているのだと思います．

その保育・教育の実践の過程に，イマジネーションをもって深く関わろうとする大学教育によって，子どもや障害のある人の生活のなかにある本質的で大切なこと，そして実践における指導の根本が，無意図的ではあっても結晶のように，一つの学問領域と方法を形成しつつあると私にはみえるのです．発達保障の理念による発達理論と実践がつながるのは，子どもや障害のある人，そしてその人々が営む集団なのであって，そこに焦点をあてて，私たちの発達研究と保育・教育研究をむすびつけていくことが求められているのだと思います．

職場や地域での本書の学習を契機として，目の前の「…くん」「…ちゃん」や「…さん」をわかろうとする事例研究，そして実践研究が，網の目のようにつくられていくことを願っています．

さて，旧版『教育と保育のための発達診断』は，本書の執筆者の共通の師である田中昌人先生，田中杉恵先生の追悼として刊行されたものでした．新版の編集のなかで出会った執筆者のまなざしは，外でもなく，田中先生のもとでの大学教育において，目を開くことのできたものだと感じるのです．そういったことについて，共通の具体的な言葉をもって教えを受けたことはありません．どちらかと言えば，放任された自由な雰囲気のなかで私たちは学びました．しかし，無形に伝えられ，息づいていくものも，教育にはあるのではないでしょうか．レバノンの詩人，カリール・ジブランの言葉を，私は自分の大学での日々とともに思い出すのです．

「教師は，自分の英知を与えるのではない．与えるのはただ，かれの信念と慈愛だけ」　（佐久間彪訳．預言者．至光社．1990）．

今，新型コロナウィルス感染症の災禍のもとで，わが国政府がいかに国民一人ひとり，そして社会的に弱い立場の人々の生活と幸福に対して無頓着であったかが，露呈することになりました．その根本的な矛盾を改めていくには，さ